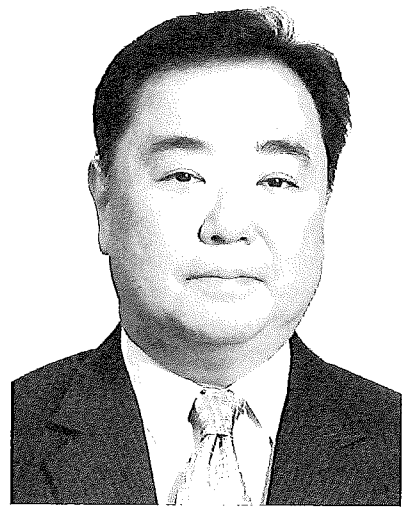




記念講演



関ヶ原から読み解く日本近代史 ～中国地方の徳川400年～

徳川宗家19代
徳川記念財団 理事

徳川 家広

ご来場の皆様こんにちは。徳川です。
今日はあまりに壮大なタイトルで私も何を話しているかわからないですけれども、地区大会おめでとうございます。私の祖父も松平一郎と申しまして、ずっとロータリアンでございました。私はロータリー腕時計が格好いいぐらいしか、高校生ぐらいでわかりませんでしたけども、何か深い繋がりを感じております。という事で本題に入らせていただきますが。

今もちょうどですね。江戸と長州の争いということで、関ヶ原の戦いとほぼ同じようなことになって、しかも大雨まで降っていて本当によく似ていると思いますけれども、いったいどうなるのでしょうか、早くも江戸が落城したという知らせも聞こえております。

関ヶ原の戦いというのはですね、いつの間にか日本人が全員ある程度分かっている日本史上の事件というのはこれ一つになってしまいました。第二次(世界)大戦も名称にしてからがよく分からないで、「先の大戦」になってしまいました。明治維新もですね、非常に長いイベントとしては漠然と皆さん分かっておいでなんですけど、行く土地によって例えば誰が主人公なのか全然変わってきたりですね、東北地方に行くとそもそもあれは間違いだったとか、話を蒸し返すような人も出てまいります。江戸時代以前のことはですね、こりゃ完全に分からなくなっております。ということで、時代劇を見ればお侍さんがいます。じゃあ、いつから始まったんでしょうか、関ヶ原の戦いで、漠然とはわかっています。

関ヶ原の戦いの発端はですね、1598年に豊臣秀吉、天

下人ですけれども、関白をやめて太閤という称号でしたが、この方が亡くなります。豊臣秀吉は幼い子供が一人いるだけでございまして、豊臣家と日本の未来がどうなるか非常に心配でした。最初は、かつてのライバルで当時日本の秀吉に次ぐ、実力者の徳川家康に「あなたに後の事は任せるから」と言うんです。しかしよく考えてみますと徳川家の所領が250万石、豊臣家が200万石で、向こうの方がちょっと大きいぐらいなので、こんな人に権力を渡したらどうなるかさっぱりわからない、というわけで五大老というのを設けます。徳川家康、前田利家、上杉景勝、毛利輝元、地元岡山の宇喜多秀家さんです。徳川家康250万石、上杉景勝120万石、毛利輝元 同120万石、前田利家80万石で、宇喜多秀家55万石なんです。この非常に大きな大名さん達もって一種のまあ、内閣を作ってもらいましょう、でその下に事務方として五奉行というのを設置するんです。石田三成、浅野長政、前田玄以、増田長盛、それから長東正家です。そういう布陣で、更にまだそれでも心配なので三老というのを置いたらしいと。これが誰だったかな、生駒親正と中村一氏(なかむらかずひで)と、それから松江城を造った殿様でございまして。今すぐ名前が出てきませんが。そういう布陣で、チェック&バランスをなんとか図るんですね。あっ、そうそう堀尾吉晴でございまして。失礼いたしました。松江城の城主でございまして。ありがとうございます。

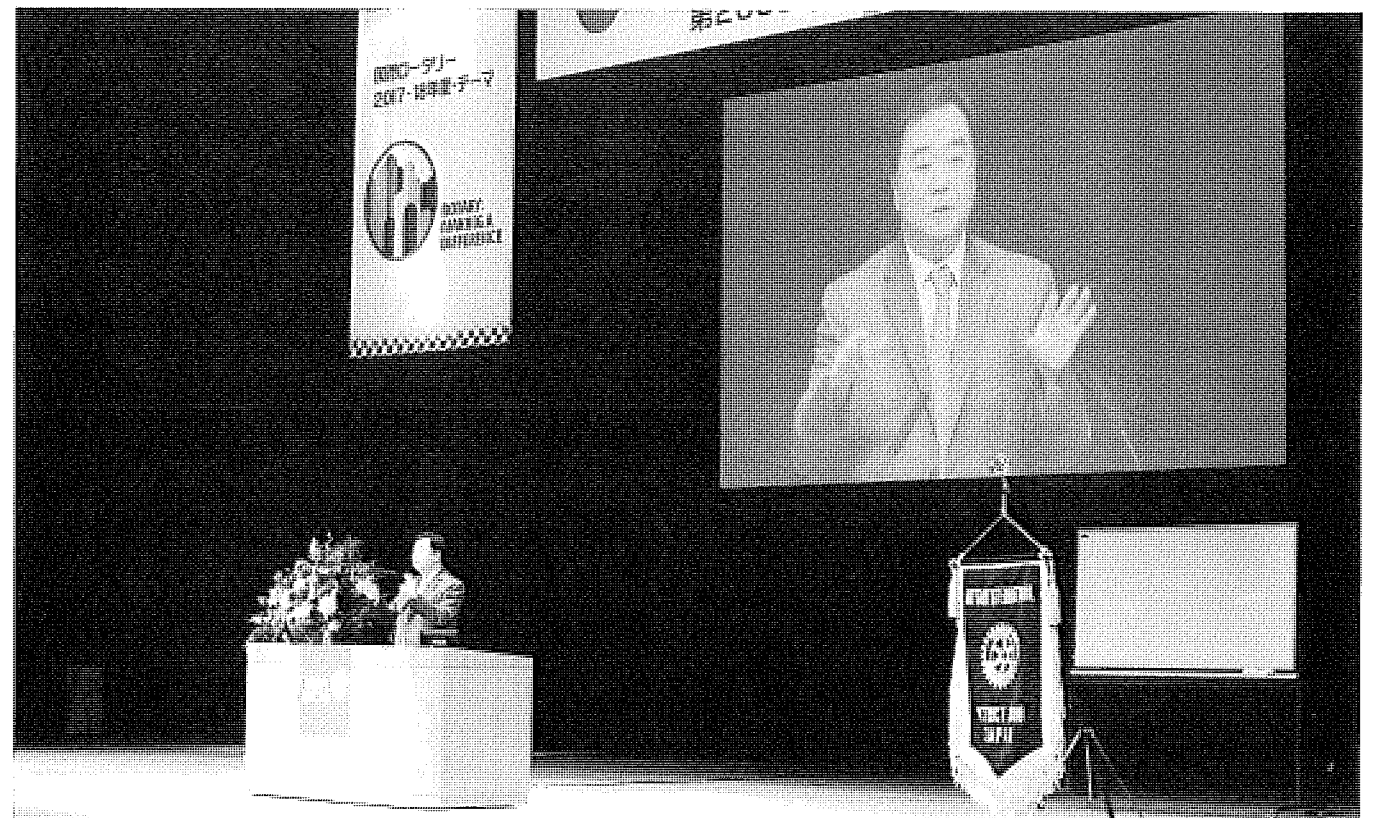
松江ロータリークラブの皆さんから怒りのオーラが見えましたので一所懸命思い出しました。(笑)

とにかくですね、そうやって近代的とも言えるチェック&バランスにして、豊臣の天下を長引かせようとするんです。しかし、豊臣秀吉が亡くなった翌日には既に綻びが見え

ております。徳川家康と前田利家、二人で相談して、その時の日本は既に六年間、朝鮮半島で中国軍と戦い続けていたんです。で、豊臣秀吉が亡くなった翌日に徳川家康・前田利家はこの遠征軍を日本へ呼び戻す決断をしておりますが、なんとその日の内に石田三成は徳川家康を暗殺しようとしております。しかし、この暗殺計画が全然うまくいかなかったようで、続報はありません。

その後、日本軍は肅々と戻ってきますけれども、石田三成は徳川家康をこのままにしておいたら、必ず豊臣家にとって良くない事が起こると、子供でも分かるような事なんです。そう思っております。もう1回徳川家康を暗殺しようとしたという形跡がございまして。しかしですね、三成も実はたいへん不人気な人でありました。というのは、朝鮮で戦っていた武将達は、三成が秀吉からのお目付け役として朝鮮半島にやってきて、そしてこいつはろくすっぽ働いてないみたいな報告を散々秀吉にあげたということで、みんな結構ひどい目に遭っておったんです。ですのである日、朝鮮七将といわれておりますけども、加藤清正、福島正則、細川忠興、黒田長政、浅野幸長、池田輝政、蜂須賀家政 7名が三成を襲撃いたします。この時、三成は親しかった佐竹義宣公の屋敷に逃げ込んで、そこから徳川家康にとりなしてもらいます。徳川家康の裁定は朝鮮七将の方もここは、事を荒立てないと、もうこれ以上三成を攻めるのをやめなさいと、その代わり三成は豊臣政権の五奉行から外れてくださいねという事で、三成は失脚してしまいます。命は取り留めますが失脚いたします。その後、今度は五奉行の内の次に筆頭と

なった浅野長政という人なんです。この人が前田利家と組んで、徳川家康を暗殺しようとしたという風説が流れるんですね。結果として長政は大坂城を去る事になり、そして利家は自分のお嫁さんを、この時は息子になってたかもしれませんけれども、まつですね、「利家とまつ」のまつを家康への人質として江戸へ差し出すという事をやっております。こうして石田三成がいなくなります。浅野長政がいなくなります。そして前田利家も完全に屈服いたします。続いて、徳川家康は大坂城に残っている大名達に対して、皆さんも朝鮮での苦勞などがあると思うので、国許へ帰って兵馬を休めなさいと宣言します。かくて上杉景勝も毛利輝元も宇喜多秀家も全員国許へ帰っちゃうんです。実はこの時点で徳川家康は大坂城において、豊臣政権の独裁者になっているんです。しかし、それからしばらくして、今度は東日本から急報がもたらされます。それは何かと言いますと、国許へ帰った上杉景勝がしきりに浪人者を集めて、そして領内のお城の修繕を施しています。これは豊臣公儀に対する謀反を企てているのではないかと思います。これは隣の元々の上杉領の越後の国の殿様の堀さんと、それから上杉景勝の家老の二人から報告がもたらされたわけです。徳川家康はどういう事だということを問い詰める書状を上杉景勝に対して出すんですけども、景勝の代わりに軍師格の直江兼続が返してきた手紙の内容が大変無礼だったという事で、徳川家康は激怒して自ら上杉を討つと言い出してしまいます。結果として、大阪と江戸の間にいた豊臣恩顧の大名達、そして徳川軍などが、ぞろぞろと江戸に向かいまして、江戸からさらに会津へと向かって行くと。徳川軍が会津





と江戸の中間点の小山という、今も新幹線の駅がありますが、そこに到着した頃に、石田三成が蜂起したという知らせが届くんですね。のみならず石田三成は大坂城の近く、京都の伏見城を攻めようとしていました。伏見城には徳川家康の幼馴染の非常に忠実な家臣の鳥居元忠という人がいましたけれども、二千人程でお城を守っているところですが三万人ぐらいで攻めてこられて、当然のように全滅いたしてしまいます。徳川家康は当然ながら、もの凄く怒るわけですよ。小山でもって評定いたします。

そこで豊臣恩顧の大名も大勢来ていて、奥さん・子供を大阪へ人質に取られていると思う。ですから、そうするところから自分の為に戦う事はできないだろうと。大阪へ帰ってきたら、遠慮なく帰らなさい。道中に邪魔をするような事はありませんよと、言ったところ福島正則が立ち上がりまして、自分は妻子の為に武士の道を踏み外すような事はあつてはならないと思う、ここは徳川様に付いていきますと言うわけです。すると更にそれまで無名だった山之内一豊という人が立ち上がりまして、自分は掛川に城を持っておりますが城も領地も徳川様に差し出します。こうなると、他の人たちは本心はどうあれ、ついていかざる得ないという事で、ここで東軍が結成されます。その後徳川軍は2つに分かれます。徳川家康と井伊直政、合わせて徳川方の兵力三万、それに豊臣恩顧の大名達、およそ20名がくっついてまいりまして、これが五万～六万の間です。これが江戸に下りまして、東海道を大阪へ向けて攻めていこうという作戦があります。残り四万人は徳川秀忠、徳川家康の四男ですけれども、これが率いていく事になりました。秀忠はまず、宇都宮まで登っていきまして宇都宮城を修理します。なぜか。上杉軍が攻めてくるといけないからという訳です。しかし上杉方は防戦一方になっておりますので安心して、これは中仙道を通って、関ヶ原、まあ大阪まで向かっていくという事になりました。やがて、途中徳川家康がなかなか江戸から出てこないかと、色々あるんですけれども、9月15日、雨の降る日に早朝から東軍と西軍との戦いが始まりまして、だいたい夕方4時には戦いの決着がついておったといわれております。

この最終段階において、戦いの中において例えば一番大きな軍勢を持っていた毛利さんなんですけれども、これは軍師の吉川広家が徳川家康と通じていて、まったく動かなかった、それからもう一つ、小早川秀秋、豊臣秀吉の甥っ子から小早川という大名の家に養子にっていた人物で、これもまた徳川家康と通じていて、これがこちらに至っては裏切って、西軍石田三成の本陣に攻め込んで、これで戦いの帰趨が決着したという事がありました。そして戦いが粗方終わった後で、鹿児島からやってきていた島津義弘率いる一千名の部隊、これが突然徳川家康の本陣に向かって突進してまいります。徳川家康の本陣というのは、東軍の一番兵力が密集しているところですよ。総大将を守っているんだから、当然です。この時いたのが、七万人ぐらいなんです。そこに向かって一千人で突入していきまして、大変な損耗

率でございます。最終的に50名ちよいまで数を減らして、それでも命からがら、大阪に到着。そこから船に乗って鹿児島へ帰りました。これが関ヶ原の戦いの一部始終でございます。

これはだいたい、皆さん大河ドラマで何度も何度もご覧になっておいてのはずです。2017年も井伊直政というかなりマイナーな人なんですけれども、井伊直虎か、さらにマイナーですね。の人が主人公ですけども、たぶん、紅白歌合戦の直前ぐらいには今の話になるんです。私、数えてみたんですけども、だいたい3回に1回、大河ドラマでは関ヶ原の戦いの一部始終を描いております。という事で、この話は皆さんご存知のはずなんです。ご存知だとは思いますが、実は突っ込みどころ満載と言いますか、政治と歴史にある程度通じていたら、「これおかしいでしょう」という事のオンパレードでございます。何が一番おかしいかと言いますと、石田三成という人は大変な知将、頭の良い武将であったと、よく言われておるんです。

そしてもう一つ、徳川家康と石田三成の年齢のギャップが、かなり大きいんです。徳川家康が58(歳)ぐらい、石田三成は45(歳)。今ですと、45と58で能力的にも体力的にもあまり変わらないんですが、当時の常識で言いますと、これ今の感覚に直して55(歳)と75(歳)なんです。片方は男盛りで、もう片方は後期高齢者なんです。傍証を申し上げますと、主な戦国大名で自然になくなった方、暗殺されないで一生を終えた人というのは、だいたい50代半ばで亡くなっています。70代まで永らえている有名な戦国大名というのは、毛利元就公だけなんです。ですので、関ヶ原に向かってくる徳川家康というのは、結構おじいちゃんであったと、たまたま76～77まで生き永らえている事は、私たち全員知ってるから、富士登山でいうところの5合目ぐらいですよという感じなんですけれども、本人は結構終わりが近い感じがしつつも頑張っているわけです。こういう時、石田三成、若い方の人には決定的な優位点があります。それは持ち時間が長いんです。つまり1600年というタイミングで石田三成が徳川家康に対して喧嘩をしかける理由がありません。10年待っていたら相手はもう亡くなっている可能性が相当高いです。というか、徳川家康が実際亡くなっている1616年まで石田三成が生きていたとすると、関ヶ原の徳川家康と同じぐらいの年齢なんです。じゃあ、なぜ三成はそもそもこの戦いで待たなかったのか、それだけならいいですよ。それだけならいい。ここが勝負所だと思ったのならいいんですけども、最初に申し上げましたように、豊臣秀吉が亡くなったとたん石田三成は徳川家康を暗殺しようとして、これは相当ちゃんとした歴史の研究書の中にも出てくるんです。でもこれ非常に不思議です。なぜかと言いますと、その時の日本は、先程申し上げましたように、朝鮮半島におよそ10万、へたをすれば20万の大軍を駐在させていたんです。ただ駐在させていただけではありません。朝鮮半島で中国軍と戦っておりました。当時の中国は明帝国と

申しまして、これは世界で一番の金持ち国なんです。そして世界最高の文明国でもありました。そして人口は日本の5倍ですね、5～6千万、そんな国と、しかもこちらから海を渡って遠征して行って、六年間戦い続けているんです。これは今の感覚で言いますと、20万と言いますと、今の自衛隊とだいたい同じ規模なんですけれども、でも当時の日本の人口で1300万人なんです。今の日本の人口の10分の1、という事は今の感覚で言いますと、200万の大軍を海外に遠征させて、その上で一つと戦わせている状態です。今の日本の防衛予算はだいたい5兆円ですから、その20倍ぐらいを毎年使っています。つまり六年間戦って、政府の赤字が600兆円増えた。

これが豊臣秀吉が亡くなった時の豊臣政権の惨状だった訳でございます。

これ、もう秀吉が亡くなったら、すぐに呼び戻すというのは、常識的だとは思いますが、ここでもし、石田三成が徳川家康を暗殺することに成功していたらどうなったか。もうその知らせは、すぐに朝鮮半島まで伝わります。そして帰ろうとする日本軍はパニックを起こします。さらに言いますと、朝鮮と実際軍隊を出している明は、敵は豊臣秀吉も徳川家康もつまりナンバーワンもナンバーツーも死んでいる、もう頭のない烏合の衆の状態だといって、それまで強かった日本軍ですけども、猛然と強気になって攻めてかかります。ですから20万でいっていた軍隊が20万帰ってくるんじゃないし、10万になるあるいは5万になる、そして命からがら帰ってきた兵隊達は、そんな体力が残っているかどうか分からないですけど、徳川家康を殺して、その惨状、もう惨憺たる撤退の原因を作った石田三成を必ず討ちに参ります。

つまり徳川家康をその時点で暗殺していたら、豊臣政権はおろか日本という国自体が崩壊しかねないんです。ですので、いったい石田三成はなんでそんな事を分からないのか、と大変な疑問が生じてまいります。

その次に、関ヶ原の戦い自体でも大変不思議な事があります。何かと言いますと、石田三成が大坂城にやってきて徳川家康を討つべしとやって、それに宇喜多秀家も毛利輝元も同調する訳ですが、そうやって蜂起をして、東へ向かって攻めていくわけですよ。そして京都にある伏見城を落城させます。そこまではいいんですけども、これ、あと10日ほど待っていたら、徳川軍と上杉軍の戦争が始まっているんです。上杉軍と徳川軍、上杉軍120万石、徳川家康250万石、プラス豊臣恩顧200万石、450対120でございますが、どっちが勝つかは、言うまでもないんですけども、しかし上杉方はもう自分のホームテリトリーでございます。相当激しい抵抗を見せていたはずなんです。つまり、ある程度は膠着してしまう、その戦争が始まってから、石田三成が蜂起すると、これは徳川軍の中に大変な動揺が走ります。特にいわゆる西軍、毛利、宇喜多、石田、こういった連中が東海道を江戸に向かって攻めてきますよと言うと、これは徳川家康にくっついてきている豊臣恩顧の大名たちの領地が全部踏みにじられてしまいます。そういう意味でも人質を取られていることはなんとかなっても、自分の領地をやられたら、これお仕舞いでございますので、もう徳川軍はその場でバラバラになってしまうリスクがたいへん高かった。なので、石田三成はなぜ上杉と徳川の戦いが実際に始まるまで待たなかったのか、つまり人生で3つほどちよつと、そそっかしい手を出し





ているわけです。この人は相当おつちよこちよいなんではないかと、知将どころではないと私は考えておるわけでございます。これは石田三成に関わる疑問点でございます。

じゃあ、徳川家康の方が全く合理的に動いているかと言うと、そうでもありません。まず論功行賞の問題がございます。それは何かと言いますと、関ヶ原の戦いの終盤において、島津義弘率いる薩摩隊、最初二千人程だったのですが、石田三成の近くにずっと何もしないで待っておった結果、千人程は既に討ち取られています。じっと我慢しておりましたが、戦いが終わってからいきなり、徳川家康の本陣に向かって突っ込んでいきました。そして55名まで兵力を減らして。この島津隊なんですけども、島津家なんですけども、関ヶ原の戦いの結果、どういう罰を受けたのでしょうか。

毛利輝元、西軍の総大将は120万石が36万石まで減らされました。上杉景勝、これ関ヶ原の戦いのそもその発端を作った人です。120万石が30万石まで減らされています。宇喜多秀家、今ではすっかり忘れ去られていますけれども、西軍の実質的な親玉はこの人なんです。55万石がゼロです。長宗我部盛親、土佐の国主でありまして、もう少しで四国を統一するはずだったのを、豊臣秀吉に押し出されてしまいました。なかなか強い大名ですけれども、これも20万石がゼロなんです。石田三成、安国寺恵瓊、それから小西行長、このあたりは全員斬首されております。じゃあ、あれだけ激しく東軍と戦った島津隊はいったいどうなるであろうかと言いますと、55万石は安堵されております。そのまんまです。で、更に言いますと、少し江戸時代に入ってからなんですけど、最終的に77万石になっているんですね。江戸時代を通じて最大の大名というのは、将軍家を別にしますと加賀の前田さんの100万石です。その次は仙台の伊達でも尾張の徳川でもなくて、鹿児島島の島津なんです。これ意外に知られていない事実です。しかもこれどうやって55万石から77万石まで増やしたかと言いますと、それは沖繩を征服する事を幕府があとから認めているんです。今でこそ沖繩を征服しても、面倒臭いばかりですけれど、当時の日本からしますと、沖繩というのは世界への窓だったんです。なぜか。豊臣秀吉の朝鮮出兵、これそもその目的は中国を征服する事だったんです。その結果として、日本は中国と貿易ができませんでした。

で、今では中国と貿易ができなくとも何ということもないように思えるのですけれども、当時の、つまり16世紀末から17世紀あたりにかけての世界に於いては、中国と貿易ができないというのは、贅沢品が一切手に入らなくなるという事を意味しているんです。一番わかりやすい例が、絹です。それからコットン。なぜかという、戦国時代までの日本人というのは、麻の服を着ていたんです。これは夏は快適だとか私なんかは思うわけなんですけど、でも実際にはゴワゴワ

していて、しかも毛羽だっていて身体中痒くなる、そういう服だったんです。ですから、それが一度、綿とシルク、これに慣れてしまうと麻布(あさぬの)の生活には戻れない。それから食器の陶磁器です。釉薬のかかっているせともの類いは、これも全部中国からの輸入でした。ですので、日本では何を使うかと言うと、木を掘って作ったお椀とあとは素焼きなんです。ですので、食卓もまことに殺風景でした。ですから、また綺麗な食器で食事がしたいと、どうしても中国から輸入せざるを得ない。一番大事だったのが朝鮮人参でございます。朝鮮人参というのは体の血行を良くするんですけれども、これで戦国時代の病気のほとんどが治ったというか、これしか薬がなかったのです。薬も衣料品も食器も全部中国からの輸入で頼っていたのが、その貿易が途絶してしまいました。ところが琉球王国、当時の沖縄は独立国です。琉球王国というのは、中華帝国、明帝国の正規の属国なんです。中国というのは、他の国との外交関係というのは属国しかないので、つまり、まともに中国と外交関係があって、貿易もできます。そういう状態にあったわけです。つまり関ヶ原の戦いで、東軍に対してものすごく激しい敵意を示して、実際犠牲もたくさん出している薩摩藩は、沖繩を通じて中国と正式に貿易をする特権を手に入れているわけでございます。これいったいどういう事でしょうか。論功行賞でもう一つ実に不思議な事があります。それは二代将軍になった徳川秀忠なんですけれども、この人、実は関ヶ原の戦いに来ていないんです。のみならず関ヶ原の戦いでは、徳川家康の直属の部隊が3万人、徳川秀忠の直属の部隊3万人なんですけれども、実は、本当に戦力になるのは秀忠隊の3万の方なんです。徳川家康が率いていたのは、防衛専門なのでございます。ですからいくら連れて行っても、徳川家康の安全は確保されますけれども、あまり役に立たないです。

そして関ヶ原に遅れてきた事で徳川家康が怒って、後から詫言を入れに来た秀忠としばらく会わなかったなどというエピソードもあるのでございますが、結果として、二代将軍にしておりまして、お兄さんもいれば弟もいるんですけれども、それにつきましてはですね、秀忠は関ヶ原に遅れた事からもわかるように、たいへん凡庸な方ですけども、世の中平和になってきたから、トップは凡庸な方がよいという判断が働きました、という解説をする学者さんがいるんです。しかし、徳川家康が徳川秀忠に将軍職を譲ったのは1605年でありまして、豊臣家が滅亡するのはその10年あとですから、全然平和な世の中ではないのでございます。さらに不思議なのは、徳川家康が徳川秀忠に主力を与えて、全然別のルートをたどって来るように命令するとしましょう。するとですね、絶対信用しないわけです。心許ないという事で。何をするかというと、絶対道草食っちゃたらダメよと、いついつまでに、岐阜城まで来なさいとか、そういう指令を出すわけです。それでもまだ心配だから、ベテランの補佐を付けるんです。実際家康はそうしております。榊原康政、以下2名ほどの、自分とずっと一緒に戦ってきた徳川譜代の重鎮中の

重鎮をサポートに付けておるのでございます。ところが不思議な事に、この3人はまったく詰め腹を切らされるわけでもなく、のうのうとその後永らえまして、そして1604年に徳川家康が部下の家臣たちに次の将軍を誰にするのが良いかと諮問すると、諮問された相手というのは6人おるんですけれども、榊原康政をはじめその内の4人は関ヶ原の戦いで徳川秀忠にくっついて中仙道を通って、途中で信州の真田家のお城を攻めて遅刻してしまった人達なんです。ね。

つまり秀忠は大失態を演じたけれども、じゃあ、その秀忠を将軍にするべきか否かを問い合わせた相手が、その秀忠が遅刻する原因を作った、とまでは言わないけどそれに対して連帯責任を負う人たち4人なんです。6人のうちの4人なんです。当然というべきか、厚顔無恥というべきか、その時の4人は結局秀忠公が一番良いと思いますというふうな結論を出しまして、徳川家康はそれに従いました。いったい何が起きているのでしょうか。こんな手間を取るんだったら、馬鹿な子ほどかわいいのだと言って、誰にも相談しないで秀忠を後継者にすればよさそうなものですけれども、何重にもうまくいかないような事をした挙句に、うまくいかなかった張本人たちに、どうするべえかと聞いてですね、その言うがままにして全く謎の人事でございませぬ。大変大きなクエスチョンマークです。そしてプロの歴史学者の皆さん、だれもこの事を指摘しておりません。しかし、色々本にするつもりなんですけれども、書いたり、調べたり、喋ったりしている内に、益々不思議になって参りました。何かと言いますと、関ヶ原の戦いの発端を作った上杉景勝、いったいこの人は何を考えていたのかと、いう事なんです。ね。

80万石の前田利長は、家康を暗殺しようとしたという全く根拠のない嫌疑をかけられただけで、恐縮してお母さんまで人質に差し出しているのでございます。なのに80万石なら駄目でも120万石なら大丈夫かという、全然そんな事ないんですね。120万石と250万石が戦ったならば、絶対120万石は負けます。なのに一体この人は何故そんなに強気で徳川家康に対峙してきたのかと、ここで、よく直江兼続と石田三成との間に密約があったのだという話があるんですけれども、石田三成20万石なんです。ですので、上杉と石田を足してもまだ話になりません。ということは、上杉景勝は毛利輝元と宇喜多秀家も反家康で立ち上がるというふうに信じていた、と考えるとある程度説明が可能になってくるんですが、しかし、会津と広島、毛利家は広島なんです。広島と岡山とが結託して江戸を討つ、これはあまりに遠いんです。その間、メッセンジャーを走らせても十日ぐらいすぐ経っちゃうんです。往復すると二十日間。それでどうやって結託するの、かという問題がございます。さらに、もう一つは仮に、上杉と毛利、宇喜多の間に密約があったとしても、最初に徳川軍と衝突するのは上杉なんです。すると最初にダメージを受けるわけです。そうまでしていったい何故上杉は、毛利・宇喜

多との同盟にこだわるのか、云々と非常に不思議だなという事が出てくるんです。

そしてもう一つ。非常に不思議な事がございまして、関ヶ原の戦いに関して言いますと、豊臣対徳川だというふうに理解する人が非常に多いんですけれども、よく見ると、いわゆる西軍にいる豊臣秀吉に仕えていた大名というのは、小西行長、石田三成、真下長盛、3人だけなんです。3人合わせて50万石いかなんです。小早川秀秋。これは豊臣秀吉の甥っ子なんですけれども、小早川の家は毛利家の重鎮、家老だったんです。小早川隆景という偉大な戦国武将がおりまして、この人がずっと生きていたら、関ヶ原の戦いはなかったと私は思っておるんですけれども、その家に入りました。ですから秀秋本人が、ちなみに秀秋の「秀」は秀吉の「秀」。一字もらっています。秀秋本人が何を考えていようと、小早川家の家臣らは全然違う考え方をします。そして毛利120万石、さらに宇喜多55万石、これは関ヶ原の戦いの直前に、岡山藩内のお寺と神社を潰しまして、その土地を搔っ攫っております、これが70万石と言われております。でも西軍をよく見ると、毛利と宇喜多なんです。豊臣はほとんど影がちょっとあるだけなのでございます。一方東軍なんですけれども、特に関ヶ原に実際やって来た顔ぶれを見ますと、徳川家康が3万人、250万石でございませぬ、その他は加藤清正はおりません、蜂須賀もいません。云々と言いましても、豊臣系の大名が半分以上なんです。石高で合わせますと200万石、300万石超えるところまでいっております。しかも、その全員が石田三成よりも長いこと豊臣秀吉を知っております。つまり豊臣濃度という、豊臣「度」みたいな数字を求めますと、それは東軍の方が西軍より濃いんです。いったい何が起きたのでございませぬか。

このように関ヶ原の戦いなんかは、だまし絵みたいでございまして、私たちが知っている話は筋は通るんですけれども、ちょっと考えてみると「あれ、おかしいぞ」という事のオンパレードなのでございます。

これから種明かしをしまりますと、実はこの関ヶ原の戦いで一番問題だったのは何か、それは徳川か豊臣かではありません。豊臣秀吉が亡くなった時点で徳川家康がその後の天下を押さえるであろうという事は全員、コンセンサス(合意)ができていたんです。そうではなくて、ここで揉めていたのは朝鮮出兵の後始末なんです。先程申し上げましたように、だいたい今のお金に直して600兆円ぐらいが費やされているはずなんです。

GDPの1.2倍。それぐらいを使ってしまったわけです。その結果として何が起きるかという、実は豊臣家は結構安泰で、実際朝鮮に渡って戦った武将たちが傷ついているんです。それがいわゆる豊臣恩顧の大名たちなんです。

加藤清正なんかは典型的ですが、黒田もそうですし、島津もそう、長宗我部もそう。ついでに言うと毛利と宇喜多というのは第一次、第二次それぞれの朝鮮出兵で元帥、つまり遠征軍の総司令官をやっているわけなんです。ですので、朝鮮出兵が終わった、つまり豊臣秀吉が亡くなって、徳川家康と前田利家が遠征軍を日本へ呼び戻した段階では、豊臣恩顧の大名たちは破産状態にあったという風に理解するのが正しいわけです。だってそうでしょう。6年間海外で戦争を続けていて、その間収入が増えるような事は何一つないんですね。しかもいい事が全然ないので、単にそのお金がかかるのみならず、家臣団が殿様の判断を疑い始めるわけです。さらに言うと、領地の農民たちも重税に加えて戦争について行った、これは侍になる最後のチャンスですので、農民も大勢ついていっているわけです。これがもう殺されてしまっただけで帰ってこないから、年貢が払いたくないわけがございませぬ。自身の懐は空っぽ、部下たちからはバカにされる、領民たちは年貢を払おうとしないという事で、朝鮮出兵で戦った豊臣恩顧の大名たちは、もう存亡の危機という状態にありました。ではいったいそれに対して、豊臣政権の最高実力者の徳川家康は何をしようとしたか。



最初から朝鮮出兵に反対ですので、自分の領地を削って差し出すなどということは絶対にしませんが、豊臣政権の最高責任者なので、豊臣家の200万石を削ってみんなに配ろうとは思ったと思うんです。そこに立ち塞がったのが石田三成でございました。

もっと言いますと、おそらく豊臣秀吉の遺言というのが、朝鮮で勝つまで帰るなというものだったと、そういうふうには私は理解しております。そうしますと徳川家康という人は朝鮮にいる日本軍を呼び戻そうという決断をした瞬間に、豊臣秀吉の命令に背いてるんです。そうすると石田三成が徳川家康を暗殺しようとするのもよく分かります。そして石田三成がその後も性懲りもなく何度か暗殺しようとするのも、よく分かります。

それに対して、あの朝鮮七将というのは自分たちの首とか、全てがかかっている状態ですから、当然ながら三成を抹殺しようとするというわけでありませぬ。しかし、ここで大変な問題があります。何かと言いますと、日本軍、戦争には負けておりますけれども、戦闘には勝ち続けているんです。日本から攻めていった連中というのは、ここで手柄を挙げたら出世できる、とこう思っているわけなんです。一方、朝鮮を守りにきた中国軍というのは、自分のところが攻められているわけでもないのに、なんでこんな所まで連れて来られるんだという感じで戦意が低いんです。ですので日本兵一人が中国兵10人に相当する、それぐらいの戦いぶりだったんです。薩摩の兵隊さんに至っては100人の部隊で1万人の中国軍を蹴散らしたとかなんか、アメリカのマーベル・ユニバースみたいな話になっているわけがございませぬ。ですので、もう1回攻めるべきだという人たちもいるんです。これが関ヶ原の戦いの本当の対立の構図でございませぬ。宇喜多秀家という人が55万石の領地の中で、お寺と神社の領地を全部没収したというのも、これは関ヶ原で勝って、徳川家康の250万石を取り上げて、それを軍資金にして第三次朝鮮遠征軍を作るという意気込みが表れているのに他なりません。一発勝負をかけていたわけでありませぬ。

そしてもう一つ。何故、豊臣家にずっと仕えていて共に豊臣の天下を築き上げた大名たちは、みんな東軍についたかということがございませぬけれども、これは豊臣秀吉という人の最高権力者としての振る舞いを見ると、だんだん分かってくるんですけれども、朝鮮に攻めていった段階では豊臣恩顧の武将たちはそれなりに教養もありますから、中国が当時世界の中心だと分かっているんです。同時にそれまで秀吉についてきて全てもうまくいっているんです。絶対無理だろうという時でも必ず勝利を何とか捻り出すのが豊臣秀吉だったわけがございませぬ、だから今回も何か秘策があるんじゃないかと思っただけで、それで朝鮮まで攻めていったわけがございませぬ。ついでに言いますと、秀吉も誇大妄想でもなんでもなくて、世界帝国を築いたスペイン王国、スペインのフェリペ2世という人も、16世紀後半、秀吉と同時代の人ですが、二千人いたら中国を征服できるとそういうプランを持っていたんですね。ですから、それをイエズス会士とかから聞かされた秀吉がその気になっても無理もないのかもしれない。ついでに言うと、当時の中国というのは海からは日本人がちょこちょこ海賊として攻めてきて、内陸部からモンゴルがしょっちゅう攻めてくるので挟み撃ちされている状態だったので、大国ではあり経済大国でもあったんですけども、軍事的には結構脆かったと。そういう要因が色々ありましたけれども、しかし日本軍としては海を越えて外国で戦うのは初めてですから、全然うまくいかないわけがございませぬ。そういうわけで結果として秀吉の作戦は失敗に終わったわけがございませぬ。誰の目にもこれ勝ち目のない戦いだというのは、だんだん分かってくるんです。6年もやっていけば嫌でも分かりますけれども。そうすると、海を渡った日本の武将たち・大名たちは、いった

い太閤さんはなぜこんな不毛な戦争をいつまでも続けるんだらうか、という事を不思議に思い始めるわけがございませぬ。するとそのうちに、関白秀次が自殺に追いやられたとか、千利休が切腹を命じられたとか、そういった嫌な情報、嫌な出来事を思い出して総合すると、結局秀吉は自分が死んだ後、秀頼が天下人としてずっと居続ける上で、豊臣恩顧の大名たちが邪魔なんですね。細川忠興、黒田長政、浅野幸長とお父さん達は全員秀吉と互角かそれを上回る頭の持ち主ですよ。そして秀吉が本当に下っ端だった時から彼の事をよく知っていて、どんな事をして権力を手にしてきたかをずっと見ているわけがございませぬ。

そういう人間が邪魔で邪魔でしかたない、だから自分たちを朝鮮の地で、異国でもってすり潰すつもりなんではないかと、こういう結論になったというふうには私は考えております。秀吉の性格を考えると、そうなんです。本当に自分の事しか考えておりませぬ。

という訳で、まあそういう結論になった時点で100年の恋も一発で冷めてしまうという、そういう状態がございませぬ。それまでは共に豊臣の天下を築き上げてきたんですけども、もう知らないよと。だって豊臣の天下は豊臣秀吉とその直系の為のものだけでしかないじゃないですか、という事ですね、そこから先、朝鮮半島で豊臣恩顧の大名たちの考え方が完全に変わります。豊臣の天下は知らない、自分の家だけを大事に考えてここからは行動する。それを一番よく分かってくれるのは徳川家康さんであろうと。どういうルートかは分からないですけど、家康に相談するわけがございませぬ。ここで徳川家康が非常に重大な決断を下します。それは関ヶ原の戦いのような事をして、秀吉が亡くなったあとには、皆さんの大名家としての存続を保障しましょう、その上でポスト豊臣でどういう形かは分からないけれども、徳川政権ができます。徳川政権にとって最大の課題は何かと言いますと、これは朝鮮と中国との国交再開、つまり和解なんです。その上で何が問題になるかと言いますと、朝鮮半島で頑張り過ぎちゃった人たちはアウトです、もちろん朝鮮にもう1回攻めていこうと考えている大名たちもアウトなんです。朝鮮にもう1回攻めていこうとしているのは、毛利であり宇喜多でありと。そしてもう一つ言いますと、実は上杉景勝もそうだった可能性が高いんです。この人は元々新潟の大名だったのが、会津に移されているんですけど、どうやら朝鮮半島に渡って戦っているようでありませぬ。そして船という事で見ますと、毛利家の領地は今の鳥取まできていますから、鳥取から新潟のあの直江津というのは、当時の航海術でも決して遠くはありません。とは言え、朝鮮で頑張り過ぎたお家として徳川家康が非常に困ったのが、これ実は島津義弘なんですね。先程申し上げましたように、島津隊は100倍の中国軍を蹴散らすだけの活躍をしてしまったので、朝鮮王国側のブラックリストのトップに来ているんです。加藤清正、まあどうでもいい。福島正紀、まあいいや。消される大名のリストが出来ていって、島津だけは徳川家としてはどうしても潰したくない。もっと言うと、関ヶ原の戦いみたいな込み入ったシナリオを

作って持ってきたのは島津家ではないかと、私は考えているんですけども。

そういう事がありました。そうすると、はたから見ると徳川家康に対して最悪最強の敵に見えるけれど、関ヶ原の戦いで、まかり間違っても西軍が勝つような事にはならない、にはどうすればいいか、それは西軍に紛れこんで戦いの決着がついた後で、徳川家の本陣に向かって突っ込んでいくこと、要するに島津家が何をやったかという、西軍の勝利に貢献することは全くない、だから西軍は負けちゃうわけがございませぬ、ままた、徳川家とは敵だよというシグナルを発する事に成功したんです。そして先程申し上げました琉球王国の征服は1609年なんですけれども、1609年というのは徳川幕府と朝鮮王国の国交が再開された年でもあるんです。つまり朝鮮王国との国交再開することで、幕府もつまり日本も朝鮮半島経由で中国と貿易ができるようになったんです。その同じ年に島津家は琉球を征服してこれも中国と貿易ができるようになりました。ですからこういう形で朝鮮出兵の後始末をしました。でも朝鮮出兵が終わったと、もっと言うと豊臣秀吉が亡くなったあとの直後の日本では、このあとどうするか、もう1回攻めて行くのか、それともなんとか平和への道を探るのかでもって、心が真っ二つに割れていたんです。ではどうしますと、いったいなにゆえ、この話がさっぱり今に至るまで伝わっていないかという、外交で割れた時に、日本人で殺し合うんだとしたら、外に向かって戦争をして、たとえ討ち死にするのであっても、そっちの方がよいという価値観が非常に濃厚だからなんです。外国との戦争をやめたいから同じ日本人と戦争を起こすというのは、受け入れられない、そういう日本人が圧倒的多数だからがございませぬ。ですから、これほんの2年前ぐらいまでタブーでございました。2年前に何が起きたかと、私が事の真相に気が付いたという事がございます。それはさておきまして、今言ったような説明ですと、例えば徳川秀忠はいったい何故二代将軍になったのか、とこれ非常によく分かるんです。何かと言いますと、徳川本体3万人が関ヶ原に現れていた場合、一番活躍して一番手柄をあげるのはこの人達なんです。すると、徳川家康にくっついて関ヶ原までやってきた豊臣恩顧の大名たちは手柄を十分にあげられませぬ。そうすると朝鮮出兵の損失補填ができないのです。一方、徳川秀忠が率いている兵隊たちも、この戦い、次の戦いで手柄をあげたら大名になれるかもしれない。だからどうしても戦場に行きたいんです。戦場に行きたがっている連中を、信州上田城かなにかを攻めて、道草を食らわせて暴動も起こさせないという事で、これはなかなかの政治手腕なので、二代将軍に相応しいという事になりました。

そしてもう一つ。関ヶ原の戦いの謎を申し上げますと、毛利軍、毛利輝元の軍隊。毛利輝元本体は大阪にいて、東軍が攻めてきた場合に備えているんですけど、結局まったく戦わないで撤退しているのです。それは毛利家の家老の吉川広

家という人が徳川家康と組んでいて、戦わなかったら120万石の領地を安堵してください、手を付けないでおいてください。そういう約束をするわけでございますが。結果として大坂城の毛利輝元が西軍勝利の暁にあなたには何万石あげようという手紙を日本中に送っていて、その下書きが見つかった結果、一時は毛利家お取りつぶしとなるんです。それが吉川広家のとりなしで36万石だけ維持したという事なんですけれども。これ不思議なのは毛利家は元々、120万石でございまして、これが関ヶ原で実際に戦っていた場合に、東軍が果たして勝利できたかどうか分からないんです。という事は、120万石の毛利家が動かない事の代償というのは、250万石ぐらいなんです。もう130万石ぐらい貰わないとおかしい、いったい吉川広家は、何故120万石の現状維持で徳川家康と手打ちをしたのか、という事でございまして、要するに上杉景勝と毛利輝元、殿様たちは朝鮮に攻めて行きたかったけど、家老の直江兼統と吉川広家は、それはまったく不毛でもう1回戦争したらば、それぞれの家が潰れるとよく分かっていたからと、こう理解するしかありません。ですので、関ヶ原の戦いというのは、これ実は外交を巡る争いだったんです。そして外交を巡って争った事は、日本国民に知らせてはいけないという事で、江戸時代を通じてこのことは完全にタブーでございました。

しかしながら、ここでようやくこの「近代日本に至る400年」の話になるんですけれども、まずこの生き残った東軍の大名たちなんですが、これと徳川家康の間には、それまでの日本史において存在しなかったような強い信頼関係が生まれているんです。徳川家康、あるいはその他の大名たちと家臣団の間にはとても強い信頼関係は元からございます。

徳川家康16歳で初陣を飾ってから亡くなるのは76歳の時でございまして、家臣団に対して60年間命令を下し続けているわけです。そうなりますと徳川家康のパーソナリティというのは、家臣団から後の幕府へとずっと伝わっていつてしまうんです。これは分かりやすいんですけど、今の関ヶ原の戦いの説明で、生き残った豊臣恩顧の大名たちと徳川家康。これ最初に関ヶ原の戦いをこういうふうにやりましょうという打合せをする段階で、徳川家康は部下も大勢連れて行くけれど、直属軍を超える数のよく知らない人達と一緒になんです。豊臣恩顧の大名たち。人となりは分かっているつもりでも、人間土壇場になると何をするか分からないわけでございます。でもそういった元々敵だった連中と一緒にずっと関ヶ原までやってきて、そして関ヶ原で号令を下すと。みんなその通りに動いて、頑張ってくれました。一方、徳川家康と組むことにした豊臣恩顧の大名たち、果たして徳川さんを信じていいものだろうか。というのは、あんな大物然としているけれども、実はさっと自分の持っているものを取られるかもしれない。これは具体的には何かと言いますと、関ヶ原に徳川秀忠の率いる4万人3万人が、時間通りにやってきていたらば、豊臣恩顧の大名たちは、豊臣家を裏切っただけでほとんど何も手に入らないで終わっ

てしまうリスクがあったんですね。つまり、どっちも相手に裏切られたらひとたまりもないわけです。そして相手にはとても裏切るインセンティブが強く働いているのです。でも約束を守っているのです。ですので、こういうふうに関ヶ原に裏切られるかもしれないと両方思っていて、でも両方約束を守りましたという、その後にはかつてないような信頼関係が生まれます。

ちょっと例えは悪いんですけども、一緒に赤い羽根の募金をしても仲良くなりません。でも一緒に人に言えない悪い事をするとうまい仲が良くなるわけでございます。そういう感じで徳川家康と豊臣恩顧の大名たちで、豊臣家を騙し討ちにしたようなものでございまして、その後味の悪さもスパイスにして、非常に強烈な信頼関係が生まれました。という事で、でも信頼関係が生まれるとはどういう事かと言いますと、安心して自分の心配事を相手に対して言えるようになるんです。なぜかと言いますと、自分が心配している事というのは相手から見ると、自分の弱さなんです。信用できない相手に対して、自分の弱さをさらけ出すような真似は絶対しないものなんです。自分はこういう事を心配しているのだと、ポツリポツリと関ヶ原の東軍の大名たちと徳川家康が腹を割って話し合うようになると、実は考えていることが全員同じでございました。それは、豊臣秀吉みたいな化け物が復活してきたらば、自分のボンクラの息子とか、もっとボンクラの孫たちは一発でやられてしまうと。つまり自分たちがここまで苦勞して築き上げてきたものが、もう一度秀吉が出てきたら全部搦手攫われてしまう、というその恐怖なんです。

なので、自分たちが今持っているものを守るためには、どうすればいいんだろうかと、そこで話し合っただけで、江戸時代の仕組みなどでございます。

これ何かと言いますと、まず江戸時代の日本にはちゃんと成文憲法がありました。「禁中並公家諸法度」というものがそうなんです。これは天皇陛下は学問に専念してくださいませ。というところから始まりまして、公家の家はどうあるべきかから、朝廷の人事の具体的な順番から全部書いてありまして、しかもこれ最後に征夷大將軍 徳川秀忠、関白 二条昭実、そして徳川家康三人の署名があるから、これ契約なんでございます。イギリスの名譽革命より早く日本には成文憲法があったと、これはみなさんに知っていただきたい事でございます。

その後に武家諸法度と社寺法度というのがあって、二度と応仁の乱のようにならないようにしました。

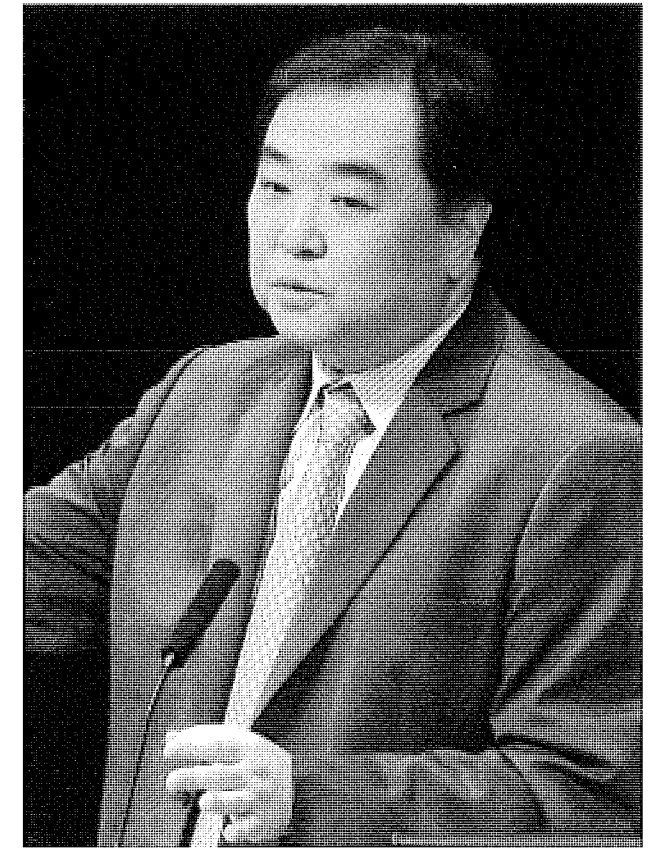
応仁の乱というのは、結局社会の頂点を占める人たちの内紛なんです。それから、応仁の乱が起きてから、ずっと乱世が続いたのはなぜか。それは食いつぶされる人間が大勢出てきたからだ、じゃあ食いつぶされないためにはどうすれ

ばいいか、経済学も何もない時代ではございますけれども、とりあえず土地を広げましょうという事で、日本中で土地の埋め立て、干拓作業が行われる訳でございまして。ここ岡山県もそうです。隣の広島もそう。島根も鳥取もおそらくそうでございまして。江戸に至っては、日比谷の交差点までが入江だったと。それを全部土地にしたんです。ここで江戸時代の最初の五十年間で、土地を劇的に拡張させたお蔭で、江戸時代の最初の百年間で日本の人口1300万から3000万まで増えても、餓死者が出てないわけでございます。つまりこの経済成長策は非常にうまくいきました。それと埋め立てをする事には、もう一つ意味があります。それは、海賊をいなくすることなんです。豊臣秀吉の朝鮮出兵、なぜ二十万いや十萬かな、十萬、十五萬、二十萬といった大軍を朝鮮半島まで送り込む事ができたかという、海賊がものすごい数いたからなんです。海賊はどうして発生するかと言うと、農業と漁業だけで食べていけないからなんです。だからとりあえず、まともな仕事をしていたら人から奪わないでもいいところまで経済のストックを充実させましょう、こういう政策を取りました。

そしてもう一つ、江戸時代で非常に重要な事なんですけれども、全員豊臣秀吉と直接、接していた人たちですので、能力のある人間というのは、どんなに上から押さえつけても、必ず頭角を現す、これは身を持って体験しているわけでございます。秀吉が出世していった時代というのは、なんだかんだ言って身分制がまだ非常に強かったんですね。私たち、織田信長を標準にして考えるから、見えなくなってしまうんですけれども、島津も武田信玄、上杉もそうですし、今川義元、さらに途中で潰れちゃうんですけれども、大友宗麟。全部鎌倉時代まで遡れる武家の名門なんです。そういう家に生まれているんでなければ、そもそも政治に参加する権利がなかった。そういった中で豊臣秀吉は全てをぶち壊して出てきてしまったわけでございます。ですので、江戸時代の日本というのは、士農工商の身分制が非常に強調されます。これは当然なんです。他に社会秩序の作り方というのはなかったんです。身分制で親から子へと伝えていく以外に社会の仕組みを安定させる方法がありませんでした。

でも同時に、江戸時代というのは抜擢の時代でもありません。能力がある人間であれば生まれのいかに関わらず、例えばお医者さんの家の養子になるんです。さらに民間人で頑張れば、その名前はちゃんと後まで残ってます。一番分かりやすい例が伊能忠敬で、村の庄屋さんみたいな人なんですけど、日本中を歩いて実際に測って日本地図を作りました。

素晴らしい業績です。でもこれ他の国だったら、伊能忠敬をバックアップしていた幕府の役人が手柄を横取りするわけです。でも日本ではちゃんと今に至るまで伊能忠敬の名前というのは伝わっているわけでございます。ですので、政治エリートの間で結束を固めましょうと、経済成長の基



礎をちゃんと整えましょう、人材を抜擢する仕組みを作りましょうということ、だいたい今の国家運営であっても核になるようなことを江戸幕府は導入するわけでございます。ここで中国地方の歴史に移りますが、それはなにかと言いますと、豊臣秀吉の置き土産というのは二つありました。一つはどんな身分に生まれても能力・才覚と運の良さがあれば、人間トップまでいけるんだと、彼は身を持って証明したんです。

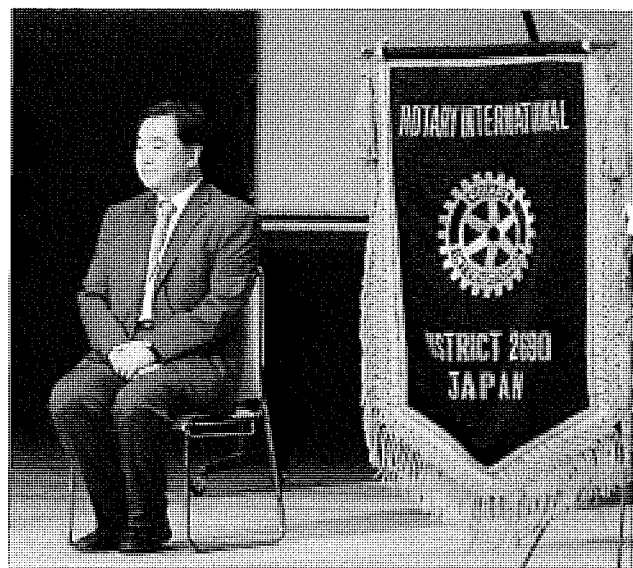
ですから、江戸時代というのは、それに対応した仕組みを作らなくては行けなかった。それが、身分制度となかなか両立しにくい抜擢のロジックで、抜擢社会であります。それを今お話しました。もう一つは特にこれ朝鮮出兵の時に、海を越えて朝鮮まで攻めていった人たちとは、ほとんど西日本の人たちなんです。彼らは全員、朝鮮に行って日本人がもの凄く強いという事を記憶して帰ってくるんです。だからこそ宇喜多も毛利も、もう一回。もっと言えば福島正紀だって、加藤清正だってもう一回と思っているわけで、だからこそ消されてしまうと。これは江戸時代に入って身分が安定する大名でさえそうですので、朝鮮に行って戦って、でも出世できなかった庶民はなおのことなんです。ですから、旧毛利領・宇喜多領に関して言うと、江戸時代にも隠然たる反幕府の気持ちというのはずっと伝わっていくわけでございます。ですから岡山と鳥取の殿様は池田さんなんです。池田輝政というのが池田家の元祖と言っていると思うんですけども、この人、お父さんを徳川家康に殺されているので



ございます。これももちろん、いわゆる殺人ではなくて、小牧長久手の戦いという戦の時に、徳川方の本陣を攻めに行った池田恒興という人が、これ戦死しちゃってるんです。そしてその息子の輝政、とても豊臣秀吉と北政所にかわいがられておって、豊臣一族も当然の扱いだったのです。けれども、さっさと豊臣家を見切って徳川家康についております。そういう事情は庶民派は分かっていないので、まず姫路に池田家を置いて、のちに岡山と鳥取 両方に池田一族、一時は津山・美作、鳥取、岡山と合わせて池田家の所領というのは、95万石あったんです。なぜそこまで厚遇するかというと、その95万石の土地に領民は豊臣、もっと言うと朝鮮出兵に対して非常に強い思い入れがあったからなんです。同じことは広島浅野という家についても言えます。浅野という家は、北政所の義理のお兄さんなんです。浅野長政公。その息子の浅野幸長の時に和歌山に参りまして、さらにその息子の浅野長晟という人の時に広島藩主になるわけでございますけれども。広島というのは、毛利輝元が造った町なんです。しかも何のために造ったかという、広島の南の方に広がる多島海に日本水軍を結集させると。これ実は日清戦争の時も大本営は広島城に置いて、広島港に日本海軍が終結して中国へと、朝鮮半島へと攻めて行ったという前例がございます。そういう土地ですので、庶民レベルでは毛利家人気があるものすごく強い、もっと言うと、もう一回朝鮮に攻めにいきたいという気持ちがとても強いんです。

実際には、浅野という家は徳川家康と浅野長政ほとんど二人三脚で、だから豊臣から徳川というのは権力の移譲がスムーズに進んでいくんですけども。でも、浅野と言えば豊臣家に一番近い家ということで、広島の人々にとっては、一番すわりが良かったんです。ですから大名の配置からして、こういう気の配りようでございます。

特に鳥取の池田家と徳川將軍家とは何度も何度も何度も結婚を重ねているんです。今の池田家のお姫様のお父



様、池田憲実(のりぎね)さんという方は、私、存じ上げていて1回お目にかかりましたが、自己紹介の時は必ず『鳥取の池田』とおっしゃらないんです。『最後の將軍の孫です』とおっしゃるくらい徳川將軍家と密接なんでございます。ところが明治維新の時には、鳥取藩はすぐに倒幕派になるんです。それは何故かと言いますと、江戸時代を通じて殿様とか家老職というのは幕府とべったりであっても、そこから下の家臣団も町の人々も大半は戦国時代、朝鮮出兵、毛利王国120万石の記憶がずっと残っておったと、こういう事なのでございます。ですので、明治維新の時に岡山藩もわりとさっさと倒幕に移ってしまうんですけども、最初は薩摩・長州・広島でやろうとかいう話もありましたとか、あるいは鳥取藩がさっさと倒幕派に移ってしまう、それは関ヶ原の戦いで毛利家の領地を大幅に縮小されたんですけども、毛利の統治、さらに言いますと朝鮮出兵の経験というのが、江戸時代の終わりまで民間レベルまでずっと続いていったということの表れではないかというふうに私は考えております。そうやって生まれた大日本帝国なんです、先程の話で申し上げましたように、薩摩というのは最初から幕府寄りでございます。徳川家と島津家の間に非常に深い深い深い信頼関係がございます。ですので、明治新政府というのも薩長がどうしたという話はよくなされるんですけども、実態は長州藩の志士と、そして京都のお公家さん達が固まるんです。それに対して旧幕府系の人たちと薩摩藩の人達が固まります。なぜこうなったかと言うと、当時の幕末の国内世論においては長州と公家の方が圧倒的に、これ幕府を倒してきたわけでございます、圧倒的に声望、レジティマシー(正統性)、人気が高かったんですが、長州藩の人達というのは、今で言う『大阪維新』みたいなんです。もう統治能力がないのであります。京都のお公家さんというのは、これは皆様の想像を絶してワイドショーのコメンテーターみたいな人達なのでございます。この二つが組んで、周りに西洋列強が進出しておりますと、日本という国は3日と持ちません。なので、薩摩の人達は身を切るような思いで幕府と戦って、そして新政府を作り、そして新政府の中であって江戸幕府の平和主義を継続しようと必死の戦いを繰り広げていくわけでございます。どれぐらい必死だったかと言うと、戦後になって鹿児島出身の総理大臣は一人もいないんです。山口県からは3人目でございます。これは広島とか鳥根とかを入れますと、さらに戦後の日本というのはずっと毛利領から総理大臣が出続けている事になるんでございます。ちょっと時間の関係で飛躍はあるんですけど、そういう事で、そもそも私が明治維新で一族が皆殺しにされてここに私が存在しない、というような事にならなかったのも、やはり関ヶ原の時に仕込んでおいた徳川と島津の裏の密約のお陰だと思っております。現に私の母も薩摩の元勳の子孫なんです。でもここで誰も知らない驚きの日本現代史のお話をさせていただきますと、旧幕府系の人達さらに薩摩の人達も、江戸時代の平和主義を何とか復活させようと、ずっと明治時代を通じて頑張っていたんです。しかし当時の日本は貧しく、そしてイギリスをはじめとする帝国主義

の列強というのはあまりに輝かしく見えました。イギリスという国はとんでもなくて、要するに金というのは人から取ってくるもんだと、という事を経済学とかそういうロジックとして組み立ててしまう程なんですけど、それが輝いて見えたんですね。でももっと言うと、日本にもそういう時代があったからです。

豊臣秀吉の朝鮮出兵、別に明が日本に攻めてきたわけではないのに、日本は空前の大軍を率いて朝鮮へ攻め入って目的は何か。明帝国を横取りする事だったのでございます。

明治時代に入って、要するに豊臣政権が復活したようなものだったんです。大日本帝国も大戦争を中国のみならず、アメリカとも始めてしまひまして、滅亡の一步手前までまいります。アメリカに占領されて、これまでの日本の仕組みでは良くないという事で、帝国議会で次の日本の憲法を決めましょうと。帝国憲法を改正して新しい憲法を作りましょうと言って、そして今の日本国憲法が生まれたわけです。占領軍の押し付け云々というのは嘘でございます。今のアメリカを見ていただくと分かるように、アメリカ人には自分の国の憲法を書く能力はありません。ちゃんとした憲法があったら、こんな変な大統領にはなっていないはずであります。

して歴史も言葉も文化も違う日本にやってきて憲法を書いて、それが70年間続くなんてあり得ないです。これはちゃんと日本人が書いたものであります。そして最後の帝国議会で今の日本国憲法を成立させたのは、私の曾祖父なんです。徳川家康から数えて十七代目の徳川家正公爵が戦後の日本国憲法を成立させまして、ここに徳川家康の平和国家の夢はやっと実現いたしました、と非常に明るいノートで今のお話を終わらせていただきたいと思います。皆様、ご清聴ありがとうございました。